

第48回創大祭・第34回白鳥祭記念

「創価栄光の集い」記念講演

許 金 平

皆さん、こんにちは。

尊敬する原田会長、馬場学長、田代理事長、ご来賓の皆様方、また大学の諸先生方と学生の皆様、本日私が光栄にも母校である創価大学に戻り、皆さんと私の喜びを分かち合うことができることをとても嬉しく思います（大拍手）。

先ほどから、私はこの素晴らしい会場、そして皆様方の活き活きとした情熱に心を打たれて大変感動しております。

私が1977年2月に創価大学を離れてから、もう41年の歳月が流れました。創大での2年間の勉強の日々は、私は昨日のように鮮明に目に浮かんで忘れません。私の人生の中で最も美しく、最も楽しく、最も充実した思い出となっております。ご周知の通り、1972年9月、中日国交正常化が実現しました。その国交正常化実現のお陰で、私と仲間一行6人が新中国発足以来、初の国費留学生として日本の大地に足を踏み入れました。国交正常化実現間もないこともあって、私たちを正式に受け入れる学校がありませんでした。中国大使館が、中国留学生を受け入れる学校を探しているという情報をキャッチされた創立者池田先生が快く「創大に来なさい」と支援の手を差し伸べられました。池田先生が私たち6名の中国留学生の身元保証人となっていただき、1975年4月7日、創価大学に入学いたしました（大拍手）。その日の夕方に、滝山寮で入寮式が行われ、池田先生が出席された際に、まず私たち6名の留学生を自分の側に呼んで、日本の皆さんに紹介していただきました。そして、みんな仲良くして、しっかりと勉強して、将来日中双方の人材になるようにとの、励ましの言葉を承りました。

今、ご臨席の田代理事長は創価大学の1期生で、私が大学に進学したばかりの頃、滝山寮に同室させていただき、大変に面倒を見て、サポートして下さり、お世話になりました（大拍手）。また私たちが正しい日本語を学ぶために、寮で同室している学生の皆さんは方言を使わず、正しい日本語を使うように、と先生からの指示もありました。また私たちが入学した時には別科を作り、若江先生が初代別科長となりました。

Xu Jinping（中日友好協会 副会長）

先ほど私を紹介していただいた石川恵子先生が、私たちの担当の先生になり、常に日本語を教えていただきました（大拍手）。石川先生。この名前を聞いた時に少しピンと来なかったんです。と申しますのは、私たちが教えていただいた頃は、越川先生でした。いつの間にか結婚されて、石川の名前に変わった。これは日本の習慣、風習でありますけれども、致し方ないな、と思います。少し面倒なことでもありますね。でも未だに越川先生というイメージが私の脳裏にあって、払拭できません。とても優しい先生でした。時には厳しい時もありました。私たちの宿題として、日記をつけなさいと先生は言われました。そして、私の日記の中には赤いペンで直したところがいつもいっぱいありました。また、福島先生と多くの先生方が私たちに日本の歴史、経済、文学、地理、日本事情など教えてくださりました。

また、私たちは中国研究会の皆さんとともに、今の東京富士美術館のある土地を開墾し、大根、小松菜、春菊などを栽培し、月見の宴で池田先生にご賞味いただいたことがあります。先生と私たちが開墾した土地で、自ら「日中友誼農場」と筆で書かれ、命名されました。その看板は、今大学の中に大事に保存されていると聞きます。大変嬉しく思います（大拍手）。

創立者池田先生が1974年12月、第2回目の訪中の時に、周恩来総理と会見されました。当時、周総理は重い病にかかっているにもかかわらず、医師団の止めるのを無視して池田先生と会われました。周総理が「50年前、桜の咲いた頃、日本を去りました」と語り、池田先生が「是非、桜の咲いた頃に日本にお越しください」と招聘されました。周総理が「行きたいですが、多分無理でしょう」と答えました。池田先生が私たち留学生、そして日本の学生に、この周総理の思いを汲んで、「一緒に桜を植えましょう」と、同年11月にこの大学の文学の池のほとりで、周総理を記念する桜を植えました。先生は、この桜を周桜と命名されました。池田先生が周総理に対し、いかに深い感情と友情を抱かれたかと、今ますます感じております。

そして、1979年4月、第1回目の観桜会が催され、そして毎年、観桜会が行われるようになりました。創大生のみならず、中国大使館、また中国代表团、在日中国機構、留学生、大勢がこの観桜会に参加し、今中日の間で話題となって、大変影響のあるイベントとなりました。2005年4月、私たち中国留学生6名全員は、母校の創大に戻り、既に大木となった周桜の前に集まって創大で学んだ日々を思い返し、大変感無量でありました。

私たちは、中国政府の指示で、1977年2月に創大を離れました。大学を離れる前に、学校側は私たちのために盛大な修了式を執り行ってくださいました。在学2年間でありますけれども、創立者池田先生をはじめ多くの先生方、学生の皆さんから、温かい励ましを受け、大自然の美しい環境の中、まるで家庭のような雰囲気にも包まれた創価大学で学んだ日々が、とても楽しく、充実して幸せで実りあったことを、私の生涯の財産として、永遠に大切にいたしております。このご恩を返すべく、中日両国の友好親善のために一生努力してまいりたいと、心に決めました。私

は創大を去った後、すぐ中国駐大阪総領事館に配属され、中国の外交の仕事に携わりました。その後、中国大使館や中国駐札幌総領事館で仕事し、また中日友好協会が民間交流の事業に身を移し、四十数年に渡って、中日友好事業に全力投球いたしました。

ただ一つ、心残りがあります。私は創大で学んだのですけれども、卒業したわけではありませんでした。修了しました。こういう残念な気持ちはずっと脳裏にあって、払拭できませんでした。創立者池田先生、そして創価大学は私たちのこの気持ちを察して、ある日突然、ダンボール一箱の参考書を送ってくださり、「勉強しなさい」と指示がありました。そして、勉強して、レポートを出して、めでたく2008年に北京で卒業証書の授与式が行われました（大拍手）。山本学長から卒業証書を受け取り、これは創大に入学して33年間の歳月を経てやっと手に入れた貴重な重い卒業証書でありました。卒業式が終わった後、山本学長から「あなたたちを、何期生にすれば良いでしょうか？」と質問されました。私は即座に「5期生にしてください」とお願いしました（大拍手）。まあ、私の計算がもし間違いでなければちょうど34期生の皆さんと一緒に卒業する年に当たります。私たちのような年配が仲間入りするというのは多分喜んでいただけないでしょう。その私の即座の判断というのは間違いないだろうと思います。

今年は中日平和友好条約締結40周年、また池田先生の中日国交正常化の提言50周年という記念すべき年にあたります。中日関係にとって、とても歴史的な意義を持っております。思えば50年前の9月8日、池田先生が東京で、2万人の学生の前で、日中国交正常化のご提言を出されました。当時、冷戦という国際情勢と、日本国内に反中国勢力が横行している中、池田先生のご提言はいかに勇気を要するものであり、卓越した先見の明であり、そして戦略的な視野を持っておられたかを、今になって益々感じられ、感銘を受けました。池田先生を始め、創価学会の皆様方は、中日関係の発展が順調であろうとも、また逆風であろうとも、一貫して中日友好の信念を堅持し、中日平和友好のために弛まぬ努力をされ、貴重な貢献をなされました。先般、原田会長が学会の代表団を引率され、成功裏に中国訪問された時に、中国人民対外友好協会並びに中日友好協会が池田先生に中日友好貢献賞を授与しました。これは池田先生のご功績を表彰しているものでございます（大拍手）。

現在、喜ばしいことに中日関係は回復され、正常の発展の軌道に戻りつつあります。安定し、健全に発展した中日関係は、中日両国人民の利益に合致するだけでなく、アジア、ひいては全世界の平和と繁栄のために寄与するものであります。1974年5月、池田先生が創価学会代表団を引率され、第1回目の訪中をされた時、中日両国に平和の金の橋を架けるよう呼びかけられました。私たち、中国留学生1期生たちはこの金の橋を渡って日本へ来て、そして創価大学で学び、両国関係を発展させる事業に投身いたしました。私たちの体験から、中日両国の世代友好を実現するためには、広範な民衆の参加が必要で、さらに若い世代が参加していかなければなりません。

両国の美しい未来を作るため、両国の民衆、さらに両国の青年に希望を託さなければなりません。したがって、中日青少年交流をより一層強化し、ご臨席の学生の皆さんが中日関係の促進の重要な推進力となるよう、心から期待してやみません。またご臨席の学生の皆さん、後輩の皆さん。この創大で学ぶ1日1日を大切に、しっかりと勉強して、将来、いかなる職場、いかなる職業にしても、世界平和に貢献できる人材、また社会発展に役立つ人材、社会変化に影響を与える人材、創大卒業生に相応しい人材になるよう心から期待してやみません（大拍手）。久しぶりに日本語でこんな大勢の前でお話しするというのは、大変緊張しております。特に私、日本語を指導していただいた石川先生の前で日本語を使ってお話しするのは、まるで在学中、試験を受けたような気持ちです。胸がドキドキしています（大拍手）。もし私の日本語の中に間違いがあれば、全て私の責任で、指導した先生の責任ではありません。最後になりますけれども、創価大学の益々のご発展と、ご臨席の皆様のご健勝とご活躍をお祈りして、私の話といたします。ありがとうございます（大拍手）。